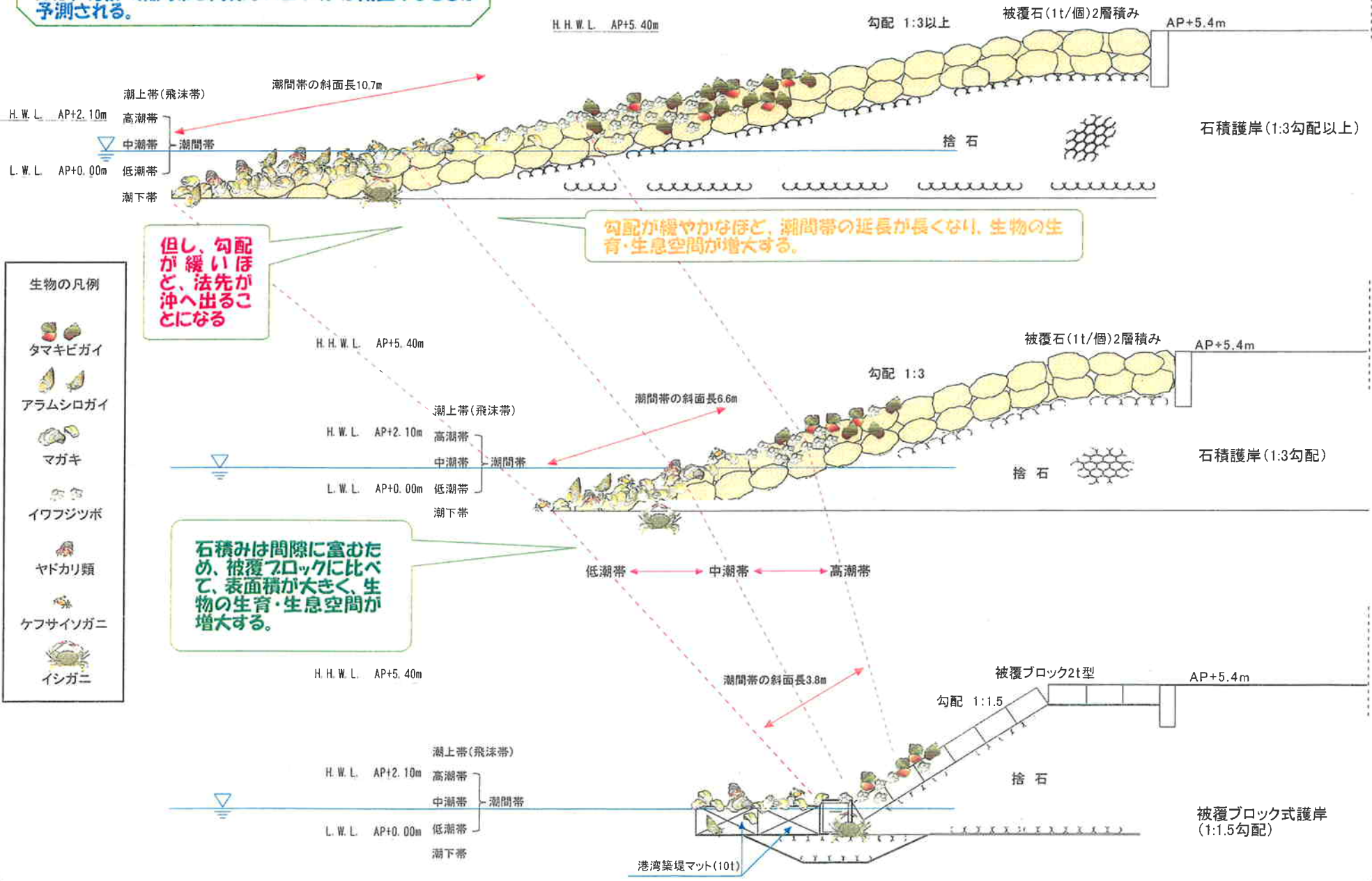


図-4 護岸改修後のハビタット復元イメージ

周辺部に同様な潮間帯のハビタットが分布すること、施工が段階的に進められることなどから、改修後の護岸には、現状の潮間帯と同様なハビタットが成立することが予測される。



- 生物の凡例
- タマキビガイ
 - アラムシロガイ
 - マガキ
 - イワフジツボ
 - ヤドカリ類
 - ケフサイソガニ
 - イシガニ

(4) 類似事例による検証

護岸改修後の潮間帯のハビタットの復元状況を把握するため、東京湾内の石積傾斜堤を対象に現地踏査を実施した。(平成17年3月27日、一般市民参加の付着生物調査)

図-5には、市川海岸近傍の千葉港習志野海岸の石積傾斜堤における調査結果を示す。

この護岸は、石積による勾配1:3の護岸であり、完成後、約一年半が経過している。

潮上帯(飛沫帯)には、タマキビガイ、アラレタマキビ、イワフジツボなど乾燥に強い生物が分布する。

高潮帯は上記の潮上帯の生物の他に、タテジマイソギンチャク、ムラサキイガイ、コウロエンカワヒバリガイなどが分布する。

中潮帯～低潮帯では、積石の陽の当たる部分は、緑藻類のアオノリ属が一面に繁茂する。日陰の部分には、タテジマイソギンチャク、カンザシゴカイ科、マガキが優占し、他にムラサキイガイ、コウロエンカワヒバリガイ、イボニシなどの貝類が多くみられた。

習志野海岸では、施工後約1年半で潮位に応じた潮間生物群集によるハビタットが形成されたことになる。

習志野海岸の潮間帯生物の構成は、アオノリ属の繁茂やムラサキイガイの生息等を除くと、市川海岸の潮間帯生物の構成に類似している。従って、このような類似事例から市川海岸においても、数年単位の潮間帯生物のハビタットが復元されることが期待される。

